



後藤博一先生の蒔かれた種（後藤博一先生退任記念号）

著者	郡司 隆男
著者別名	GUNJI Takao
雑誌名	キリスト教論藻
巻	40
ページ	1-2
発行年	2009-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001615



後藤博一先生の蒔かれた種

学 長 郡 司 隆 男

本学前学長の後藤先生は、1966年に助手として本学に赴任して以来、38年にわたって、大学の教育・行政に携わってこられました。特に、1986年から退職までの22年間はほとんど休む間もなく、宗教主事・教務部長・学長という、本学の3大激職と言ってもよい仕事を繰り返しなされ、さぞかし、心労の絶えることはなかったのではないかとお察しします。

後藤先生の経歴を拝見しますと、もともと京大医学部薬学科出身ということで、製薬会社にも勤められています。その後、教育学部に入学し直され、学部卒業と同時に本学の助手に赴任される一方、大学院に進まれ、博士課程まで終えられています。

その後、宗教主事になられるまでの15年間は、学者としては一番仕事ができた時期ではないでしょうか。1970年代後半には西ドイツに1年間の留学もなさっています。1980年代後半からは研究者、教育者であるよりも、大学の管理の仕事が中心である人生を送ってこられました。

後藤先生は、その風貌から、いつも落ちついた印象を与え、特に、お髭をのばされてからは、何事にも平静心で淡々と向かわれているように外からは見えていました。実際は、激務の中で、その心中はいかがだったのでしょうか。特に、学長としての4年間は、今に続く、少子化による18歳人口の減少の影響を得た時期で、受験生の確保に立ち向かって、次々に新たな手を打たざるを得ない時期でした。

それも、2008年度の子ども発達学科とファッション・ハウジングデザイン学科の発足によって一区切りとなったと思います。今年度より新しい体制になって、前体制の蒔いた種がどのように発芽し、成長していくかを見守っていく時期になっています。われわれ新執行部としても、後藤先生の愛されたこの松蔭

を、何とかたくましく育てていきたいと思っています。

後藤先生の本学への貢献は一言では言い尽くせないものがあります。ここに先生の功績を称えるとともに、本号を後藤先生の退官を記念する号として捧げることができるのはこの上ない喜びです。